北海道新聞
2009 年 5 月 2 日掲載

現代 かわら版

KAWARABAN

名前で読み解く エコロジー ②

【エゾエンゴサク】（ケシ科）

盗蜜の外来バチ脅威

雪解け間もないしっとりとした地面でいち早く咲き始めるエゾエンゴサクは、枯れ野にまるでコバルト色のじゅうたんを広げていくように風景を一変させます。その様子は何度観察しても感動的で、厳しい冬を乗り切った後に自然界から贈られるごほうびのよう。

目の保養にとどまらず、人は古くからこの植物を薬草や食材として重用してきました。実は名前は、地下にできる塊茎（イモ）を蒸してから乾燥させて作る漢方薬「延胡索」の音読みから。

薬事法に基づく「日本薬局方」（医薬品リスト）にもちゃんと掲載されていて、胃もたれに効く「安中散」の主要成分です。

アイヌ名の「トマ」（語源不詳）も厳密にはこの地下の塊茎を指し、「分類アイヌ語辞典」（知里真志保著）には、収穫した塊茎を二―三日水にさらしてから臼でついて粘りを出し、おモチにして食べる、という調理法が紹介されています。

かたや漢方薬や食用として用いられながら、今も見事な野生の群落を保ち、春の野原を彩ってくれるエゾエンゴサク。春のこうした風景は、ヒトがこれまでこの野草とうまく「共生」してきた証拠だと言えます。

ところが最近、衝撃的な研究報告がありました。セイヨウオオマルハナバチというヨーロッパ原産の外来バチが、エゾエンゴサクの脅威になっている、というのです。

エゾエンゴサクは、ハチに花粉を運んでもらって授精します。ところがこの大型の外来バチは、自分が潜り込めないエンゴサクの小さな花には外から穴を開けて蜜を吸い取るだけで、花粉は運びません。花に蜜がなくなれば他の虫も訪れなくなり、タネを残す割合が著しく低下するのです。

セイヨウオオマルハナバチが野外で確認されたのは一九九〇年代になってから。大きな花をつけるハウス野菜の授粉役として大量輸入されたのが、逃げ出して野生化してしまいました。

日高地方で二年にわたって野外調査を行い、外来バチの影響を明らかにした植物生態学者の堂囿いくみさん（首都大学東京大学院客員研究員）は「人が持ち込んだ外来バチが、在来生態系のバランスを乱しているのです」と指摘。この研究を一つのきっかけにセイヨウオオマルハナバチは「特定外来生物」として規制対象になりました。

益虫として連れてきたはずの外来バチが、昔なじみの薬草に打撃を与えることになるなんて、皮肉な結末です。

（フリーランス記者・平田剛士）